

あし わ

足環をつけた鳥が 教えてくれること

鳥類標識調査のこれまでとこれから



入場無料
申込み不要

定員
250名

来場者プレゼント
あります

基調講演

- 変わりゆく世界で鳥類の生態を調べるー鳥類標識調査データの価値ー
(オルデンブルク大学 ウィーランド・ハイム)

講演

- 蓄積された100年データの活用
ーバイオリギング時代に鳥類標識調査が果たす役割ー
(森林総合研究所 青木大輔)
- カラスバトによる鳥移動の謎に迫る
(国立環境研究所 安藤温子)
- 何が分かる?鳥袋: 標識調査を利用した鳥類生態の研究
(金沢大学 大河原恭祐)
- 日本で越冬するユリカモメの渡りを読み解く
ー標識調査とその応用研究からー
(山階鳥類研究所 澤祐介)

総合討論



YouTubeでも
配信します

2024年
11月23日(土)

13:00 ▶ 17:00 (12:00開場)

東京農業大学 世田谷キャンパス
農大アカデミアセンター 横井講堂

小田急小田原線
千歳船橋駅・経堂駅から
徒歩15分



主催 / 公益財団法人 山階鳥類研究所
日本鳥類標識協会

後援 / 環境省生物多様性センター (予定)

公益財団法人 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115

☎ 04-7182-1101

<https://www.yamashina.or.jp>



鳥類に足環などの目印をつけて放し、追跡する鳥類標識調査。
日本で初めてこの調査が行われたのは今からちょうど100年前のことでした。
以来、何度の中断はあったものの、日本の鳥類標識調査は粛々と実施され続けてきました。

この100年間の継続でどんなことがわかってきたのでしょうか？
そして、次の100年に向けてどんな発展が期待できるのでしょうか？
本シンポジウムでは、国内外の研究者を招いてこの問いに挑みます。



プログラム

12:00	開場
13:00-13:05	開会挨拶 (山階鳥類研究所 所長 小川博)
13:05-13:10	趣旨説明 (山階鳥類研究所 水田拓)
13:10-14:00	基調講演 (オルデンブルク大学 ウィーランド・ハイム) ■ 変わりゆく世界で鳥類の生態を調べる — 鳥類標識調査データの価値 —
14:00-14:25	講演 (森林総合研究所 青木大輔) ■ 蓄積された100年データの活用 — バイオロギング時代に鳥類標識調査が果たす役割 —
14:25-14:35	休憩
14:35-15:00	講演 (国立環境研究所 安藤温子) ■ カラスバトによる鳥移動の謎に迫る
15:00-15:25	講演 (金沢大学 大河原恭祐) ■ 何が見つかる？鳥袋：標識調査を利用した鳥類生態の研究
15:25-15:50	講演 (山階鳥類研究所 澤祐介) ■ 日本で越冬するユリカモメの渡りを読み解く — 標識調査とその応用研究から —
15:50-16:05	休憩
16:05-16:55	総合討論
16:55-17:00	閉会挨拶 (山階鳥類研究所 尾崎清明)

変わりゆく世界で鳥類の生態を調べる —鳥類標識調査データの価値—

鳥類は、気候変動や生息地の破壊、攪乱、汚染など人為的な活動に敏感に応答する。標識調査は、鳥類の生態を調べるうえで貴重なデータを提供し、鳥類への人為的影響を把握し予測するのに有効である。アジアで最多の蓄積を誇る日本の標識調査データは、鳥類の季節的な分布や変動、行動、生息地利用、生存率などの予測に活用することができる。本講演では、このデータが東アジアの陸鳥類の生態の理解にどのように役立つか紹介する。また、先進的な追跡技術を用いたプロジェクトにも基礎的な標識調査が有効であることや、調査時に採取できる羽毛や糞などの試料がもつ可能性も強調したい。アジア全域でより広範な標識調査ネットワークが確立され、多くのバンダーが率先し連携して科学的課題に取り組むことは、人為的变化に対する鳥類の応答についての理解を深めるために不可欠であり、今後数十年間は特に優先されるべきである。



オルデンブルク大学

Wieland Heim (ウィーランド・ハイム)

渡り鳥について調査する生態学者・鳥類学者。自然環境保全に根ざした研究を行い、鳥類に対する人為的影響について調べている。アジアで10年以上研究活動を行い、極東ロシアでは鳥類標識ステーションの設立にも携わった。旧北区東部に生息する鳥類の渡り経路の解明に大きく貢献している。現在は、ドイツ・オルデンブルク大学の渡り鳥生態研究グループの一員として、農薬が鳥類の渡りに与える影響も研究している。



講演

蓄積された100年データの活用 —バイオロギング時代に鳥類標識調査が果たす役割—



標識調査は、いつ、どこを鳥類が移動しているかのデータの蓄積に貢献し、鳥類の渡り研究の基盤を作ってきた。一方、近年は機械によって移動を直接追跡する手法が発展したことで、鳥類標識調査の役割の再定義が迫られている。鳥類標識調査の長年の蓄積を「ビッグデータ」として再認識し、膨大なデータを処理・分析できる「データサイエンス」の手法を活かすことが重要である。日本の鳥類標識調査データの活用のこれまでを振り返りながら、海外の動向も踏まえた今後の活躍の道筋を考えたい。

森林総合研究所 **青木大輔** (あおき だいすけ)

1993年大阪府生まれ。中学・高校をベルギーで過ごした。北海道大学大学院理学院博士課程修了。博士(理学)。現在、森林総合研究所・任期付研究員。研究テーマは鳥類の分布や渡りの進化の歴史を紐解く生物地理学。日本列島のユニークな環境を活かし、遺伝解析やバイオロギングなど多様な手法を統合して研究を進めている。



カラスバトによる島移動の謎に迫る

島嶼に生息する鳥類は飛翔能力が低下すると考えられているが、カラスバトは隔離された離島の生息地において高い飛翔能力を維持し、様々な時空間的スケールで島々を飛び回っている。このような島間の移動は、カラスバトを含む複数の島嶼生ハト目で報告されているが、詳細な調査はほとんど行われてこなかった。本講演では、これまでの研究で明らかになったカラスバトの移動パターンと、島嶼生態系における役割について紹介する。



国立環境研究所 安藤温子 (あんどう はるこ)

京都大学大学院農学研究科で博士号を取得し、現在国立環境研究所に勤務している。小笠原諸島や伊豆諸島、スペインの離島などにおいて、鳥類の移動に関連した島嶼進化、生態系機能、保全に関する研究を行ってきた。国立環境研究所や青ヶ島での標識調査も行っている。



何が見つかる？鳥袋：標識調査を利用した鳥類生態の研究

鳥類標識調査では多くの鳥を捕獲、直接手にする作業がある。そのため普段はなかなか触れない鳥から貴重なデータを得ることが可能である。また捕獲した鳥を保管しておく布製の袋、いわゆる鳥袋の中にも鳥が残した様々な情報が入っている。福井県越前町の織田山一級ステーションでは毎年大規模な標識調査が行われているが、本講演ではその内容を紹介しつつ、その調査を利用した渡り鳥の種子散布と奇妙な蟻浴行動の研究について発表する。

金沢大学 大河原恭祐 (おおかわら きょうすけ)

埼玉県出身。北海道大学博士課程卒業。金沢大学生命理工学類生態学研究室・准教授。アリや鳥を材料とした行動生態学、群集生態学、保全生態学が専門。アリではウメマツアリ属の特殊な社会性について、鳥では渡り鳥による種子散布や鳥類の蟻浴による疾患予防行動などについて研究している。



日本で越冬するユリカモメの渡りを読み解く — 標識調査とその応用研究から —

ユリカモメは、1970年代にロシア・カムチャツカ半島の繁殖地で標識された個体が大阪で見つかったことをきっかけに、関西を中心に精力的に標識調査が行われてきた。私は、日本で越冬するユリカモメの渡りルートに違いがないか、東京と福岡で標識調査を行ってきた。その結果、東京と福岡では渡りルートだけでなく、体の大きさも異なる別の集団であることがわかってきた。講演ではさらに、発信器調査、ロシアの博物館での標本調査の結果を交え、日本で越冬するユリカモメの全体像についてお話ししたい。

山階鳥類研究所 澤祐介 (さわ ゆうすけ)

2010年より鳥類標識調査に参加。自身が東京で標識したユリカモメがロシア・カムチャツカで見つかったことをきっかけに、ロシアで繁殖する鳥類に強い興味を抱く。現在はユリカモメの他、コクガンを中心としたガン類の渡りルートを調べる研究を行っている。2020年より山階鳥類研究所の研究員に着任。

